

## 達磨図について

重要な画題のひとつとして達磨図がある。達磨（菩提達磨）については、布袋と同様に『伝燈録』に詳しい。それによれば達磨はインド南天竺国香至王の第三子で、中国梁の普通三（五二七）年海路中国を目指し九月二一日に中国広州に至った。それを聞いた武帝は達磨を金陵に迎えた。ここで有名な問答が始まる。武帝は「即位以来多くの寺を建て経を写し僧を助けてきたがどんな功德があるか」と達磨に問う。達磨の答は「功德など無い」というもの。次に武帝は「仏の教えで最も大切な事は何か」と問う。達磨の答は「からりとして聖も俗も超えている」というもの。重ねて武帝は問う、「朕に対しては何か」。達磨の答は「識らず」。達磨は武帝と対話してはまだ布教の機は熟さずと感じ、嵩山少林寺に移り面壁して坐す生活に入った。

達磨はやがて弟子に慧可を得て後を托し、魏の太和一九（五三六？）年遷化し、熊耳山に葬られた。その後、魏の宗雲が西域に赴く途中の葱嶺で、履き物の片方を手に持つ達磨に会った。報告を受けた明帝は驚き達磨の棺を明けさせたところ、履き物片方しか遺っていないかったという。

この『伝燈録』の記事は、多くの虚構を含んでおり、達磨の本当の姿を記録しているとは言いがたいが、これによってできあがった達磨像こそが信仰世界の中で生き続けてきたのであり、これに基づいて達磨像も描かれてきた。

画題についての書『後素集』には、達磨に関して達磨嗅書図、蘆葉図、面壁図、隻履西帰図の四つが挙げられている。このうち面壁図は、少林寺での面壁座禅の姿を描いたものであり、最も一般的な達磨図である。日本における初期禅宗絵画の代表作である山梨向嶽寺の蘭溪道隆賛達磨図も東京国立博物館の一山一寧賛達磨図も、ともに岩壁は描かれていないものの、面壁達磨図の範疇に含めて良いと思われる。

遠州が持っていた沢庵自画自賛の達磨図が面壁であった（『小堀家道具入日記之内』）ことは間違いないが、永井信濃守が承応二（一六五三）年十月二十六日の茶会で茶屋に掛けた一休自画自賛の岩に達磨図（『江岑宗左茶書』）も面壁達磨図であったと思われる。

面壁達磨を表現する場合、どうしても達磨の側面や背面を描かざるを得ず、達磨図としてはやや不満の残る画面構成となってしまう。しかしながら、達磨の側面を描く絵画も残っている。その代表が齊年寺の雪舟筆慧可断臂図である。慧可が自分の腕を切って面壁の達磨に覚悟を示し、達磨に弟子となることを許されたという緊迫した場面を描いた絵で、達磨の側面を描くことに必然性があった。

後ろ向きの達磨を丁寧に描いたとしても何の面白味も無いが、これを単純化し一筆描きのように描くと、これはこれで味のある達磨図ができあがる。この後ろ向きの達磨は茶人に描かれることも多い。例として三井文庫の千啐啄齋宗左筆達磨面賛を挙げておこう。まさに一筆で達磨の背面を描き、「本来をしらすにゑかく達磨なれハ面目なふてあちらむいたり」との賛を加えている。禅でいう本来面目を詠み込んで本来の自己を今だわかっていないと謙遜し、あちら向きの達磨に自らを重ねる気持が、啐啄齋にはあったのかもしれない。

もう一点益田鈍翁の描いた名古屋市博物館の達磨図を挙げておこう。これは三筆で達磨を描き、「観すれハ花も葉もなし山濃以毛」という俳句を賛としている。達磨もこうしてみれば確かに山芋にも見える。

後ろ向きの達磨は、何かにとえやすかったようである。小堀遠州は正保三（一六四六）年十二月二十二日の茶会で、鎖の間に沢庵自画自賛の達磨図を掛けた（『松屋会記』）が、それには後ろ向きの達磨が描かれ、「面壁祖師ハ山城コマノアタリノ瓜カ茄子カ」という賛が添えられていた。

なお、達磨は堪え忍んで面壁九年を送ったと考え、忍の字を後ろ向きの達磨のように描く忍字達磨図などというものもある。

蘆葉達磨図は、達磨が一本の足に乗って海を渡り中国にやって来たという伝えにより、もしくは武帝との問答の後梁を出て蘆の葉に乗って揚子江を遡ったという伝えにより、描くものである。鎌倉時代から好んで描かれており、東山御物の無準師範自画賛達磨図（黄政牛図・郁山主図との三幅対）も蘆葉達磨図である。賛には「觸忤梁王恚々渡江」とあるので、無準は達磨が蘆に乗って揚子江を渡る姿と捉えていたのであろう。

片方の履き物を手に提げて歩む姿の隻履達磨もよく描かれた。『伝燈録』に記された伝説にもとづくが、蘆葉達磨とともに達磨の常人を超えた能力を持つ聖人の姿として好まれたのであろう。

白隠などの禅僧などが描く達磨図は、半身達磨図と呼ばれるものである。『松屋会記』には、永禄二（一五五九）年四月二十日の胡直夫筆の月江正印賛半身達磨図を使った住吉屋宗左衛門の茶会や、天正十一（一五八三）年二月十一日牧谿筆の無準師範賛半身達磨図を使った行春の茶会が出てくるので、中国画家の半身達磨図がかなりの数輸入されていたことがわかる。こういった絵画を参考にして鎌倉時代から室町時代にかけて日本の画家は半身達磨図を描いたのであろう。実際室町時代の芸阿弥や祥啓筆の半身達磨図も残る。さらにこういった遺品の影響を受けて、桃山時代の長谷川等伯や海北友松、雲谷等顔も半身達磨図を描いていった。千江岑宗左の茶会記には、玉室宗珀賛を持つ友松筆の達磨図や玉甫紹琮賛を持つ等伯筆の達磨図を使った茶会が見られるが、おそらく半身の達磨図であったのであろう。

大徳寺百八十五世玉舟宗璠の語録『春睡餘稿』には、達磨図の賛五十六首が含まれている。これは渡江、面壁、絳衣、回顧、半身、渡江回顧、白髪、絳衣回顧に分けられている。渡江とは蘆葉達磨のことであり、絳衣とは赤衣達磨のことである。回顧とは、振り返るように見える達磨のことではあるが、半身達磨や赤衣達磨との区別がいま一つわからない。白髪というのも謎で、まだまだ考えるべきことが残っている。

瑞泉寺の達磨図は、面壁姿の達磨を描いている。しかも風景も描いている点で、南北朝から室町時代の達磨図に近い。目の表現にも独特の物がありかなり時代の遡る作品と考えられる。この時期の水墨画に詳しい研究者によって判断される必要がある。